

序文

現代タイ社会における「精霊信仰」について

関 泰子

本特集は、科学研究費補助金による研究課題「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究—日本・中国・東南アジア—」（基盤研究（B）平成27-29年度）メンバーによって実施された調査の現在までの研究経過報告である。特に、タイ調査データに基づく考察・分析が中心となっている。

東南アジアの核的地域の基層的な宗教文化は古来より、土着信仰、バラモン教に仏教が習合して作り上げられ今日に至るといふ、言わば「多神教的世界観」に基づいている。タイ南部や島嶼部には後にイスラーム教が浸透するが、20世紀に至るまで長期にわたり、その信仰は基層文化に規定される「スーフイズム」の色彩が強かった。

「近代化」は世界に「歴史の終わり」をもたらし、東南アジアは西欧と変わらない社会に変化するであろうという主張は、日本においてと同様、もはやいかなる説得力も持たない。しかし、他方で東南アジアを覆う勢いで「欧米とは異なる未来」を提示するイスラーム教の復興運動や宗教的「純化」運動が浸透しても、土着の信仰を根絶するには至っていない。人々の生活への不安感、死への恐怖が亡くならない限り信仰は残る。現代においても東南アジアでは民間信仰は「習合」を重ね「持続」もしくは新たに「創りだされて」いるのである。

発現する状況は異なるものの、東・東南アジア諸社会では、「大伝統」と民衆の「救済思想」との間に乖離が見られ、東南アジア諸社会の宗教における「ルーシーな構造」を作り出してきた。民衆は外来宗教を「解釈」し、彼らの「救い」と

なるようにカスタマイズしてきた。その基本となる「多神教的世界観」はイスラームの浸透後も仏教徒とムスリムを結びつけ、共通の文化コードを提供してきた。しかし、昨今の精霊信仰の衰退とイスラーム復興運動の隆盛は、他方で異教徒の「他者」化を招き、ムスリムコミュニティと仏教徒コミュニティの心理的乖離を招いている。宗教の「習合」状態は近代化と共に終焉することではなく、むしろ変化する社会の新たな需要に対応すべくその姿を変え存続する。しかし、他方で、大伝統や外来宗教の影響を強く受けることにより、現代東南アジアの民間信仰は「純化」と「変化」の間を揺れ動いていると言えよう。

他方、日本社会はと言えば、明治期の「神仏分離令」によってそれ以前の宗教的シンクレティズム状態を人工的に切り離す試みがなされたが、戦後の神道は神祇信仰、神社神道、仏教との習合が半ば混沌とした状態で取り残され、その多くは衰退する一方で、一部「パワースポット」ブームという、優れて「近代的な」解釈による新しい「伝承」が創りだされている。また、戦後の「無宗教」的色彩の強い社会で育った若い世代の中にはカルト宗教に惹かれる者や、より厳格な宗教イメージの強いイスラーム教への改宗者が出現し始めている。そこまで熱心ではなくても、前述した「パワースポット」ブームも手伝い、スピリチュアルな事物に関心を持つ若者は依然として多い。

こうした現代の若者のスピリチュアリズムを把握し、その社会的背景を考察することは、本来社会学が担うべき仕事であろう。しかし、社会学ではこうした研究は皆無に等しく、小松和彦氏の一連の妖怪学研究や常光徹氏の『学校の怪談』に代表されるように、主に民俗学分野における研究として続けられているのが現状である。

こうした現状認識に基づき、我々はタイ・ミャンマーに根強く存在する精霊信仰と、それを支える民衆のスピリチュアリズムの実態を社会的に研究し、そこから提示される枠組みをもって、改めて現代日本における精霊信仰の存続、社会に蔓延するスピリチュアリズムの背景にある人々の現状認識を明らかにしたいと考えたのである。

以下、今回の特集の各論考について簡単に説明していく。冒頭の野津論文は、「クマーン・トーン」という伝統的な願掛け人形の歴史的由来と現代における機能変化・再ブームのきっかけについて、文献資料ならびにインタビュー調査に基

づき、詳細に述べられている。続くボンサピタックサンティ論文は、バンコクの複数の大学に所属する大学生を対象に実施したアンケート調査の集計結果とその考察である。ボンサピタックサンティによると、タイの大学生はスピリチュアリズムへの志向が強く、またその存在は社会に必要であると考えている。

パチャラーワーライ／チムマミー論文は、バンコク在住の社会人（高学歴中間層）を対象に実施した同様の調査であり、大学生に比べると、スピリチュアリズムへの志向はやや弱まるが、それでも、伝統的な民間信仰が根強く存在することをうかがわせる。

最後の関論文は、タイの漁民・船乗りの船霊信仰をミャンマーとの比較で論じたものであり、その根底に流れる「女性が男性の航海を守る」信仰は、タイだけではなくミャンマーにも存在し、ひいては日本の船霊信仰とのつながりもうかがわせることを主張する。精霊信仰の「文化圏」的研究の重要性を提起した内容となっている。

結論として、タイ社会における土着的な精霊信仰の存続と変容、そして、それを支える人々の根強いスピリチュアリズム志向がうかがえることが改めて理解されたが、前述の通りこの特集は、本調査プロジェクトで得られた研究成果の中間報告であり、また一部のメンバーによるものでもある。残りのメンバーも現在調査研究を継続中であり、調査全体の成果報告はまた別の機会に行いたいと考えている。

最後に、我々の拙い研究成果を公表する貴重な機会を与えて下さった、四国学院大学文化学会に心より感謝申し上げます。